地歴公民(日本史)　一橋大学　（前期）　1/2

＜全体分析＞

試験時間　120 分

解答形式

論述形式

分量・難易（前年比較）

分量（減少・やや減少・変化なし・やや増加・増加）

難易（易化・やや易化・変化なし・やや難化・難化）

分量は大問３題「400 字×３題」で例年通り。難易度は変化なし。

出題の特徴や昨年度との変更点

内容面では、Ⅰは 2022～2024 年度が近世範囲であったが、本年度は古代・中世範囲であり、例年出題されてきた近世からの出題は見られなかった。Ⅱ・Ⅲは 2022 年度が近代範囲、2023・2024 年度が近代・現代範囲で、本年度は近代範囲であった。形式面では、2024 年度はⅡが史料利用型でⅢがグラフ利用型、本年度はⅠ・Ⅱ・Ⅲが史料利用型で、近年は史料利用型の出題が続いている。

新課程を踏まえた出題

Ⅲは、歴史総合・世界史探究のⅢと共通の問題であり、歴史総合の分野からの出題が見られた。

その他トピックス

Ⅰ問２は 2024 年度夏期講習「一橋大日本史」第５講［１］で同様の内容を扱い、Ⅲ問２も 2024 年度夏期講習「一橋大日本史」第５講［２］で同様の内容を扱った。この講座を受けた受講生は有利だったであろう。

＜大問分析＞

番号	出題形式	出題分野・テーマ	コメント(設問内容・答案作成上のポイントなど)	難易度
Ⅰ	論述	古代・中世の災害と地域の政治経済・生活《史料》	問１は、設問の「この災いにより公卿の父を亡くし、九州で反乱を起こした」がヒントになる。問２は、「初期荘園に至る経緯」は基礎事項だが、資料１の内容をふまえながら時系列で経緯を説明するのに工夫がいる。問３は、『方丈記』から養和の飢饉を導くのがやや難。問４は、設問の要求がつかみにくいため、書きにくかったであろう。問５は、資料３から「生じた社会状況の変化」を推定し、それをふまえながら「御成敗式目の制定に至る経緯」を説明するのが難しい。	やや難
Ⅱ	論述	近代の日本とロシアとの関係《史料》	問１は、日露和親条約における「樺太の扱い」を簡潔に指摘したい。問２は、設問の「幕臣として戊辰戦争を戦った」がヒントになる。問３は、青木周蔵外相による条約改正交渉について、イギリスの動向も含めて具体的に説明したい。問４は、三国干渉までの「経緯」を述べるのは容易だが、当時のロシアの国際戦略から下線部(d)「遼東半島還付」の「理由」を論じたい。「影響」は、日露関係悪化の諸相を具体的に説明したい。	やや易
Ⅲ	論述	韓国併合と第一次世界大戦後の委任統治《史料》	世界史との共通問題として、日本史受験者が想定しうる解答例を示した。問１は、歴史総合の用語が問われ、難しく感じたかもしれない。問２は、「朝鮮側の抵抗」を含めた「朝鮮植民地化過程」は基礎事項であるが、韓国併合の「性格」を史料から的確に読みとれたであろうか。また、第一次世界大戦後の委任統治は日本史探究の範囲であるが、「新たな統治方式がとられた背景」については、歴史総合の学習が進んでいると書きやすかったであろう。	標準

※難易度は５段階「易・やや易・標準・やや難・難」で、当該大学の全統模試入試ランキングを基準として判断しています。

© 河合塾　2025 年

地歴公民(日本史)　一橋大学　（前期）　2/2

＜学習対策＞

日本史の理解を前提に、史料の精読や解答の的確な構成が要求されるなど、一橋大学の日本史は難度が高い。出題されるテーマは毎年ほぼ一定の範囲内に限定されているので、過去問の研究は不可欠である。前近代では、テーマ設定が社会経済史に加え、法制史を中心とする政治史や、外交史・文化史の出題もみられる。近現代では、明治･大正期における寄生地主制や資本主義の発達、15 年戦争～戦後期の政治･外交･経済などを軸に、社会史に関する出題も増えている。これらのテーマを深めるとともに、歴史総合の分野にも積極的に取り組んでいこう。

© 河合塾　2025 年